

考察』新評社、一九九三年、一七八頁。

- (57) 崔吉城「『巫俗』から見た西洋文明の衝撃と受容」『伝統文化と西洋文化Ⅱ』成均館大学出版部、一九八七年、二四四頁。

- (58) 盧吉明『韓国新興宗教研究』経世院、一九九六年、五八頁。

- (59) 詳細は拙文『東洋的キリスト教を目指して』二〇〇二年度東京大学大学院人文社会系研究科修士論文を参照のこと。

- (60) 姜甌山は自らを「弥勒菩薩」と称し、人類歴史の「恨」を解き払うために「天地公事」という儀礼を行い、上帝の権能を持って「地上の樂園」を作るという思想を展開させる。地上の樂園を作るためには、地上に残っている残酷な罪悪を「天地公事」という全人類全ての恨を解き払う役事（「解恨互生思想」）を行い、天地の運度を変え、神道を正し、万古の恨を解く必要があると説く。

- (61) 盧吉明『韓国の新興宗教』カトリック新聞社、一五七頁。  
(62) 秀村研二「フィールドとしてのキリスト教・教会」『韓国朝鮮の文化と社会』②、風響社、三四頁。

- (63) 測上恭子「韓国仏教の〈水子供養〉」『平和と宗教』No.16、一九七七年、九八～一〇四頁。

## 宗教の復権

グローバリゼーション・カルト論争・ナショナリズム

中野 毅著

四六判二七二頁 本体二六〇〇円

九・一一テロとアフガンスタンへのアメリカの報復攻撃に象徴されるように、政治的対立や民族紛争の表舞台で宗教が再び中心的役割を演じ始めたかのようである。宗教現象相互の関連、宗教現象と社会構造の変化との関連について分析する。第一部 グローバリゼーション・宗教的ナショナリズム・原理主義、第二部 カルト／セクト論争と宗教的ナショナリズム

## 現代における宗教の役割

コルモス編

四六判二〇八頁 本体一六〇〇円

宗教間の対話・協力を目指し、宗教のあり方を問い、現代社会の分析を行ってきたコルモス（現代における宗教の役割研究会の三〇周年記念出版。シンポジウム「世俗社会への挑戦」、座談会「宗教の世紀」等、真摯な討議が展開される。

## 墓と葬送の現在

祖先祭祀から葬送の自由へ

森 謙二著

四六判三四四頁 本体二八〇〇円

■東京堂出版■

## 特集 慰霊と追悼

# スウェーデンの海難事故における慰霊と追悼

おおあか よりみつ  
大岡頼光

## 1 はじめに

本特集での本稿の役割は、慰霊と追悼の文化比較のための材料を提供することである。

スウェーデン人の死生観は日本人と似ていると、スウェーデンにおける先駆的な死の人類学的研究（Åkeston 1997）を行ったL・オーケソンはかつて筆者に語ったことがある。いったい、どのような点で、スウェーデンと日本が似ているといえるのだろうか。

それを明らかにするためには両国を比較する必要がある。両国を比較するためには比べる条件を同じにしなければいけない。約二〇〇年のあいだ戦争がなかったスウ

エーデンは第二次世界大戦でも戦死者を出さず、戦争墓地も作ることがなかった。よって、スウェーデンを日本と比較するため、戦死者の慰霊と追悼の問題は本稿では取り上げないこととし、戦死者ではない死者を大量に出した両国の事例を比較検討することにした。

本稿は、スウェーデンの事例として、大戦後最大の海難事故であったエストニア号沈没事件をとりあげ、そこでの人々の慰霊や追悼のあり方についてまず報告を行う。

そのうえで、戦死者ではない大量の死者を出した日本の御巣鷹山の日航機墜落事故や阪神・淡路大震災と、スウェーデンのエストニア号沈没の比較を行い、そこからスウェーデンと日本の死生観の共通性について、何が見

えてくるかを述べることにする。

## 1・1 エストニア号沈没——戦死者ではない死者

一九九四年九月二八日午前一時頃、乗員・乗客九八九人を乗せた大型客船エストニア号は、バルト三国の一つであるエストニアの首都タリンからスウェーデンの首都ストックホルムに向かう途中、北欧バルト海で沈没した。高波の中で船首扉が壊れ、浸水したのが原因とされる。犠牲者は八五二人、うちスウェーデン人は五〇一人。スウェーデンの全人口は九〇〇万人弱であり、五〇一人の死者は、その比率を日本の人口で換算すると七〇〇〇人に近い（中村1996、ちなみに阪神・淡路大震災における死者数は六四三四人であった）。

スウェーデンは、約二〇〇年間大きな戦争を経験せず、戦争墓地も作ることがなかった。エストニア号沈没は、第一次世界大戦中に主にドイツの潜水艦による攻撃で計一二七人が亡くなって以来の重大事故であった（SOU 1999: 201-5）。

スウェーデンは、ヨーロッパにおいて第二次世界大戦

で中立を保ち、戦死者を出さなかった数少ない国のうちの一つである。エストニア号沈没という大事故の犠牲者は戦死者ではなかった。この死者に対して、スウェーデンの人々はどうな慰霊や追悼を行ったのかを、関連する文献を用いてたどってみたい。

## 1・2 遺体と二人称、三人称の死

エストニア号沈没に注目する理由は他にも二つある。

第一に、遺体の引き上げが問題になった点である。沈没したエストニア号は水深約八〇メートルの海底にあり、技術的には引き上げは可能とされた。沈没直後は引き上げに積極的であった政治家や宗教家は、のちに意見を変えて引き上げをしないという発言をし、遺族らの反発をかうことになった。この問題をめぐる状況を追うことで、そこから慰霊と追悼にとってもつ遺体の意味を考えてみたい。

日本とスウェーデンの共通性は、ごく簡単に言えば、御巢鷹山の日航機墜落事故での日本人遺族と同様に、スウェーデンの遺族の一部は沈没したエストニア号の遺体

に強い執着を示したことである。しかし、遺族のすべてが遺体に執着したわけではなく、遺族の中で遺体を引き上げるべきかどうかで意見が分かれた。そのことが、遺族ではない政治家や宗教家の発言を揺れ動かしていくことになったのである。

この問題状況を追っていくことは、V・ジャンケレビッチにもとづくことばでいいかえれば、遺族にとっての「二人称の死」（かけがえのない他者の死）と、政治家や宗教家等にとっての「三人称の死」（個人的には知らない一般的な他者の死）のそれぞれにおける遺体の意味を問うことになるだろう（Jankelovich 1996）。

第二に、個人的には知らない死者であり「三人称の死」にすぎないエストニア号沈没の犠牲者のために、多くのスウェーデン国民が慰霊や追悼に参加した点である。なぜ多くのスウェーデン国民はエストニア号沈没から大きな衝撃を受けて、慰霊や追悼に向かったのか、その理由を考えてみたい。

ここでは、個人的には知らない「三人称の死」のためになぜ多くのスウェーデン国民が慰霊や追悼を行ったのか

かという問題を問うことになる。そして、日本の阪神・淡路大震災へのスウェーデンの反応をとりあげながら、日本とスウェーデンの死生観の共通性を考えたい。

## 2 遺体の引き上げ問題

沈没したエストニア号の引き上げ問題において印象的なのは、政治家やスウェーデン国教会の意見が揺れ動いたという点である（なお、スウェーデン国教会は二〇〇〇年元旦に国家から分離されたが、エストニア号の引き上げ問題は分離以前に議論されたものである）。

大まかな流れを言えば、当初（一九九四年九月末）に遺体の引き上げを主張していたスウェーデン国教会の大主教は、一月になって前言をひるがえし、引き上げなくともよいと発言した（SOU 1996: 194）。同じく初めは遺体の引き上げに積極的だった政府も、この大主教の発言の後、一二月に遺体を引き上げずに、船自体を墓とするためにコンクリートで覆うという決定をいったん行った。しかし、遺族の提訴などの反対にあい、コンクリートで覆うことを中止すると決定することになる。